

前期西田哲学と英米の理想主義哲学

芹沢 英利

序

本論稿の目的は、西田哲学の形成過程と英米の理想主義哲学との関わりを明らかにすることにある。なお、前期西田哲学とは「絶対意志」の立場をとっていた大正時代までの西田哲学のことをさし、英米の理想主義哲学とは、T・H・グリーン、J・R・イリングワース、J・ロイスらをさしている。

一

西田幾多郎は、明治二十七年にヒュームに関する論文を作成し、翌年ごろから「グリーン氏倫理哲学の大意」を書いていく。さらに、茅野良男説に従えば、その翌年には、「英国倫理学史」を完成させている。以上のことから、西田がイギリス倫理学の研究か

ら出発したと考えてよいのではないかと思う。このことは、本格的な禅修行を開始する以前であったことから、西田哲学形成に関し、重要な意味を持っていると思われる。

この「英国倫理学史」で注目しておきたいのは、ホッブス、ヒューム、功利主義などに加え、ケンブリッジ・プラトン学派のレルフ・カッドワースや調和的世界の楽天観に立つシャフツベリについても述べていて、ある程度評価していることである。西田は、大陸の思想的伝統に近いイギリスの非主流的な思想家たちに、興味を抱いていたようである。そう仮定すると、西田のグリーン哲学研究も極めて自然なことのように思える。

二

西田は、イギリス新ヘーゲル主義の代表者T・H・グリーン

“Prolegomena to Ethics”を研究し、その内容を紹介するため「グリーン氏倫理哲学の大意」を書いた。この研究による、西田哲学形成に対する影響に関しては、先行研究の成果の上につけ加えるべきことがほとんどない。ただ、筆者は、グリーン氏の「自覚的主観者」の思想の影響については少し触れておきたい。

グリーン研究をしている時、友人に送った書簡の中で、西田は「唯グリーンが第二編の始めに *desire* も *perception* の如く *self-conscious subject* の働きに由て生し *blind Impulse* と異なりと云える処最も大切な様にて、後は言語上の争の様に御座候。」(十八、三〇—三二)⁽²⁾と述べている。また、「グリーン氏倫理哲学の大意」も「自覚的主観者」の働きに重点を置いた要約になっているように思える。そして、グリーン研究以降、西田は「自覚」、「自覚的主観」という語を用いるようになっていく。以上のことから筆者は、グリーン氏の「自覚的主観」の考え方が西田に刺激を与え、「自覚」の問題に興味を抱かせることになったのではないかと推測する。

もう一つ、グリーンの影響で、後年の西田哲学形成にとって大きなものとして、「意志」についての考え方が挙げられる。上記の書簡で述べているように、西田は第二編の「意志論」を高く評価している。このことから、西田の主意主義的傾向は強められ、明治三十五年ごろのショーペンハウアーの主意主義がヘーゲル的主知主義より *deep* だという書簡、そして明治三十九年の「自覚

主義」などで、はっきりと主意主義的になっていく。

このように、グリーン哲学の研究を通して、西田は、主意主義的になっていったと考えられるが、次第にグリーンよりも「意志」を重視するようになり、グリーンを主知主義的だとして、批判的に見るようになる。しかし、かといって、西田は理想を欠くショーペンハウアーの主意主義に同調することができない。そこで、両者の統合を求め、「主意主義者」であり、イギリス新理想主義の流れを汲む、J・ロイスの受容が始まる。明治四十年八月二十六日の日記に、「学校よりロイス及ショーペン（ハウアー）氏の伝をかり来りてよむ」（十七、一八八）とある。このロイス哲学の受容については後で述べる。

三

明治四十一年十二月十七日の西田の日記に、イリングワース⁽³⁾という思想家の本を借りたという記述がある（十七、二二三）。このイリングワースとは、ジョン・リチャードスン・イリングワース（John Richardson Illingworth 1848—1915）のことである。イリングワースは、グリーン哲学を応用し、キリスト教信仰の解明をし、カトリシズムと近代主義の総合を計ったイギリスの神学者である。グリーン哲学の影響を受けた『ラックス・ムンディ』学派の一人としても知られ、英国教会の聖職者でもある人物である。著書としては、“Divine Immanence”, “Reason and Revelation”, “Chris-

tian Character", "Personality human and divine" などが挙げられる。この中で、西田が確実に読んでいるのは、"Personality human and divine" である。

西田は、『善の研究』で、宇宙は神の人格的発現ではあるが、神は宇宙の進行を離れた主観的精神のような者ではないとグリーンとその一派を批判した後で、イリングワースからの引用をしている。おそらく、西田はイリングワースがグリーンの影響を受けた神学者だと知って、その著書を読み始めたと思われる。

このイリングワースからも、西田は「自覚」についての影響を受けたと思われる。西田は、『善の研究』において、「イリングワースという人は『人および神の人格』と題する書中において、人格の要素として自覚、意志の自由、および愛の三つをあげている。」(一、一八三)と述べている。これに対応するイリングワース自身の言葉を引用しておく。"These, then, are the constituent elements of personality, as such——self-consciousness, the power of self-determination, and desires which irresistibly impel us into communion with other persons——or, in other word, reason, will, and love."⁽⁴⁾ というものである。これ以降、西田は「人格の要素として自覚を考えるようになったと思われる。そのことは、西田の「人格の唯一性は自覚性にあるやうにも見える。自分で自分のことを知って居ることが、人格をして他の物と異ならしめる所である。」(十六、三四七)という言葉などから知られる。

このように、イリングワースの「自覚」についての考え方を検討しつつ、西田は「自覚」について考えていったと思われるが、やはりイリングワースもグリーンと同様に、主知主義的だとして、批判的に見ているところもある。『善の研究』でのイリングワースの引用の後で、西田は、自覚とは部分的意識体系が全意識の中心において統一される場合に伴う現象であり、知的反省の上にはなく、意志活動の上にあるものだと述べている。

また、イリングワースの「意志の自由」が即ち「一般者の自己限定」だという思想の影響も「自覚」についての思想と並んで重要だといえよう。西田は意志の自由の「自由」とは必然的自由という意味であると述べ、さらに次のように述べている。

「個人的人格の要素たる意志の自由ということは一般的なる者が己自身を限定する self-determination の謂である。三角形の概念が種々の三角形に分化し得るように、或一般的なるものがその中に含める種々なる限定の可能を自覚するのが自由の感である。全く基礎のない絶対自由意志よりはかえって個人的自覚は起らぬであらう。」(一、一八七—一八八)

この言葉は、後年の西田哲学の「一般者の自己限定」の萌芽のようなものと思われるが、「self-determination」という表現がされていることからして、イリングワースの著作からの引用と思われる。もちろん、この思想は本来ヘーゲルのもので、T・H・グリーンやE・ケアードも「self-determination」という言葉を用い

ている。しかし、グリーン研究をしていた頃には用いず、この時期に用いているということ、英語で表現しているということから、イリングワースの“Personality human and divine”からの引用と思われる。そして、むしろこのイリングワース思想の受容が、ヘーゲル哲学の方向へ西田哲学を導いたのではなからうか。西田哲学は、この時期以降、カント哲学的方向からヘーゲル哲学的方向へと次第に向きを変えていくが、イリングワースの思想は、西田哲学のカント哲学的側面とヘーゲル哲学的側面を結びつける役を担っていたのではあるまいか。

イリングワースの考えた人格の三要素の最後のものである「愛」も西田哲学に影響を与えている。西田は『善の研究』において、次のように述べている。

「イリングワースは、『一の人格は必ず他の人格を求める、他の人格において自己が全人格の満足を得るのである。即ち愛は人格の欠くべからざる特徴である』といっている」(一九三―一九四)

このように、イリングワースを引用し、更に西田は、『愛において二つの人格が互に相尊重し相独立しながらも合一して一人格を形成するのである。かく考へれば神は無限の愛なるが故に、凡ての人格を包含すると共に凡ての人格の独立を認めるといふことができる。』(一、一九四)

と述べている。これは大正八年の西田の講演での言葉に引き継が

れ、次のようなものになる。

「知識の竟まるところ人格となり、この人格はすでに coincidentia oppositorum であるが、coincidentia oppositorum の結合するものが神又は仏であつて、愛が神や仏の本質である。」(十四、二九九)

「愛」から“coincidentia oppositorum”へそしてそこから後年の「絶対矛盾自己同一」へという思想の発展過程がここから看取されないだろうか。

以上のような西田哲学に対するイリングワースの思想的影響は、従来指摘されていなかっただけに更なる研究の必要性を強調しておきたい。

四

先述のように、西田はロイス哲学を受容している。それほど重要な意味は持たないが、西田が最初にロイスの哲学に言及したのは、『善の研究』においてである。この『善の研究』における言及から、この時期既に西田がロイスの“The World and the Individual”と“The Conception of Immortality”を読んでいたことがわかる。⁽⁵⁾

更に『善の研究』以外にも「純粹経験に関する断章」において言及が見られる。例えば、

「此」は unique である。individual である。individual は

universalで絶対である。thisはいつでも centre of World である。ロイスのいふ様に(是)は意思の full realization であるとするば、ショーペンハウエルの意思は eternal present なりといふ意にも適合する。(十六、二八八)

という記述が注目に価する。前記の日記の記述もあわせて考えると、西田のロイス哲学の受容が当初からショーペンハウアーの受容と深く関連していたこと、ロイス哲学とショーペンハウアーの“eternal present”の思想が関係していると西田が考えていたことが、推察し得る。このことは、西田とロイスが共に“present moment”を重要な概念にしていること、思想史的背景として考えられるのではなからうか。

“present moment”を両者が共に重要な概念として用いていることは、実は既に海外の研究者キム (Ha Tai Kim) によって指摘されていることである。キムはそれだけでなく全体的に西田とロイスを比較している。例えば、

“By substituting the term “representative” for the term “conscious”, Royce’s “self-representative system” at once becomes Nishida’s “self-conscious system.”^(c)

という記述も見られる。“self-representative system”とは、ロイス哲学の重要な概念であり、通常「自己代表的体系」と訳されている。“self-conscious system”とは「自覚的体系」のことである。他にも、キムは、ロイスの概念である「実無限」の影響を西田が

受けていること⁽⁷⁾、ロイスの用いていた「極限概念」を西田も用いていることなどの指摘をしている。以上のように、ロイスと西田の思想的影響関係として考えられるほとんどすべてのことをキムは指摘している。これらの内“present moment”については、先に私見を述べておいたが、他の影響関係について私なりの検討を次に加えておく。

西田は「論理の理解と数理の理解」において、

「ロイスはヘーゲルの無限の定義をなお不精確であるとなし、数学者のカントルやデデキントなどの考を以て無限に関する最も明晰なる定義と考えている(省略)。デデキントによれば、或体系が自分の中に自分を写し得る時に無限である(省略)、即ちロイスのいわゆる自己代表的体系(省略)が無限である。」

(一、二六四)

と述べている。この記述から、西田がロイスの“The World and the Individual”を読み、ロイスの引用したカントール・デデキントの無限論とデデキントの集合論、そしてロイスの「自己代表的体系」の影響を受けていたことがわかる。なお、カントールもデデキントも実無限の問題や集合論の研究で知られるドイツの数学者である。西田は「論理の理解と数理の理解」で、デデキントの「数とは何か、何であるべきか」の第五節「有限と無限」から引照し、反省的意識について説明をしている。このように、ロイスだけでなくロイスが引用したデデキントのオリジナルな論文

からも西田は引用している。しかし、もちろんロイスからの孫引きでないものの、文章の流れからしてロイスの論文を下敷きとして、デデキントの集合論を考えているのではないかと思われるのである。デデキントの“Meine Gedankenwelt”の思想を例証するため、ロイスの「英国の地図」を例とした説明を西田が引用していることもその根拠の一つであるし、そもそもデデキントの集合論を先に受容したのであれば、「自己代表的体系」などという他の哲学者の概念など用いまいだろうということも根拠として挙げられる。

更に、ロイスの「自己代表的体系」の影響を受け西田の「自覚的体系」が成立したというキムの指摘は、西田の『自覚に於ける直観と反省』の序から妥当なものと推察できる。西田は、自覚的体系の形式によってすべてを説明しようという考えの示唆を得たのはロイスの『世界と個人』の第一巻の附録であつたと述べているのである(二、三)。

キムは西田とロイスが共に「極限概念」を用いていると指摘しているが、それ以上のことは述べていない。西田の「極限概念」は従来マールブルク学派の影響によるものと考えられてきた。しかし、「連続的なものは(省略)自覚的体系でなければならぬ」(二、一六五)と考えていた西田は、自己代表的体系を説明するため「極限概念」を用いたロイスに接近しているし、マールブルク学派の「極限概念」よりロイスの「極限概念」の方が先に西田に

影響を与えたと思われるのである。

明治四十四年に西田は「真理といふのは、経験が自分を超越して外界の实在に対応するのではなく、経験の発展したものが真理である。[ロイス、 $1+1+\frac{1}{2}+\frac{1}{4}+\dots=2$](十五、二〇七)と述べている。これは後に『自覚に於ける直観と反省』でも形を変えて現れているが(二、七一二)、“The World and the Individual”の一卷の愛や希望の対象となる個の限定である理念としての極限を説明しようとしている箇所からの引用である。それに対して、マールブルク学派の「極限概念」に対する言及が見られるのは大正時代に入ってからである。したがって、ロイス研究が「極限概念」受容の契機となつたと見てまず間違いあるまい。

最後に推測の域を出ないことだが一言申し添えておきたいことがある。ロイスの「自己代表的体系」は言い換えれば「自己表現的体系」である。ロイスは更に“self-expressive self”⁽¹⁰⁾という概念も用いていて、「自己表現」の思想といふべきものをもっている。このロイスの思想は後年の西田の「自己表現」の思想やライブニッツ哲学受容と何らかの関わりがあると考えられないだろうか。

このように、ロイスからの影響は大きく、「自覚的体系」形成の上で重要だが、それにとどまらず、最終的立場である「絶対矛盾自己同一」到達への「無限集合」や「自己代表的体系」が与えた影響も重要なものである⁽¹¹⁾。

結 び

以上の考察から、西田哲学の形成過程と英米の理想主義との深い関係がある程度解明することができたと思う。

両者の相違点は、西田の方がよりドイツ理想主義に近く直観を重視し主知主義に批判的だったことである。西田哲学は合理主義を超えた「絶対矛盾自己同一」の立場へ向かう哲学であり、そこが独自性となっているのだ。

受容の意義は、「自己意識」の分析から「実在」へ迫ろうとする方向、「実在」を数理を用いて説明しようとする方向へと西田哲学の歩みを促し、西田哲学を今日的な「反省的形而上学」に近づけたことにある。本来、論理では説明し難い「絶対矛盾自己同一」ではあるが、それをなんとか説明しようとする西田の哲学的姿勢を形成したという意義があったと思うのである。

最後に、本研究は、筆者の今後の目標である西田とホワイトヘッドとの比較研究の第一のステップであるということを明記し、筆を置くこととしたい。

(1) 「英国倫理学史」の成立年代は未確定。明治三十七年頃という説もある。しかし、茅野良男氏の明治二十九年成立説が自然だと思われる。これに関しては、茅野良男「西田幾多郎初期の思索をめぐって」(茅野良男／大橋良介編『西田哲学』ミネルヴァ書房、一九八七年) 参照。

(2) 括弧内の数字は『西田幾多郎全集』の巻数とページ数を示す。以下同様。

(3) 『善の研究』の西田の表記では、「イリシグウォルス」となっている。

(4) J. R. Illingworth, "Personality human and divine", 1894, p. 38.

(5) 『善の研究』で言及されている「靈魂の不滅」が「The Conception of Immortality」であるとしたことは『西田幾多郎全集』附録卷の「下村寅太郎氏の記述に依拠している」。

(6) Ha Tai Kim: "Nishida and Royce", in: Philosophy East and West 1: 4 (1962), p. 23.

(7) *Ibid.*, p. 24, 参照。

(8) *Ibid.*, p. 25, 参照。

(9) リヒャルト・デデキント／河野伊三郎訳『数について』岩波文庫、一九八二年、第二編「数とは何か、何であるべきか」。

(10) 序だけでなく、本文でも自らの「自覚」の立場を説明するため、ロイスの「自己代表的体系」の説明を用いている。明らかに影響を受けて成立したと思われる。

(11) 先述の「The World and the Individual」(Peter Smith, 1976)の附録。なお、サンタヤナは「ロイスが真に言いたいことは附録にあるとからかっている」。

(12) J. Royce, "The World and the Individual", 1976, p. 298. "So we can get as near as we choose to 2, by adding terms of the series 1+1/2+1/4, etc." からの引用。ただし、ロイスも「メーブルンク学派からの影響で「極限概念」を用いている」。

(13) 例えば『西田幾多郎全集』十一巻、二五八頁参照。
(せりぞわ・ひでとし、比較思想学、河合塾講師)